

令和8年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川中学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日 令和8年4月21日(火)・23日(木)

3 対象学年 女川中学校第3学年生徒38名 当日実施生徒 33名(国・数) 31名(英・生徒質問)

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、数学、英語
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	宮城県との比較	全国との比較
本校の国語	下回っている(▼)	下回っている(▼)
本校の数学	大きく下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)
本校の英語	大きく下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「話すこと・聞くこと」(話題や方向を捉えて内容を考える)の設問で、全国平均と同程度であった。
- ・文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつ設問で、全国平均をやや上回った。
- ・これらは、授業で継続して行なっている文章の要点整理・書き表し活動が成果として表れたものと考えられる。

(課題)

- ・「書くこと」領域において全国平均を下回った。
- ・敬語の適切な使用、相手に効果的に伝わる文章の作成に関する設問の正答率が大きく下回っている。
- ・無解答率が高い設問が多く、学習意欲の課題に加え、知識・技能の定着不足が見られる。

②指導改善のポイント

○基礎・基本の定着を図る指導

- ・ 単元ごとに知識・技能を確かめる小テストを定期的実施し、授業中の理解度を把握する。
- ・ 把握した理解度を授業改善に反映し、基礎基本の徹底を図る。

○書く活動の具体化と継続

- ・ 各教科・領域・単元で、何を書けばよいのか（内容）、どう書けばよいのか（形式・構成）を明確に示す。
- ・ 文章や資料から読み取った内容を踏まえ、自分の考えを書く活動を繰り返し行うことで、苦手意識を減らし、書こうとする意欲を高める。

③質問紙から見える傾向

○学習意識と結果のギャップ

- ・ 「国語の勉強が好き・大切だ」と回答した生徒が多い一方で、全体正答率は全国平均・県平均を下回る結果となった。
- ・ 学習意欲の高さが、思考力・記述力の定着に十分結びついていない。

○対話的・探究的な学習の不足

- ・ 対話を踏まえて考えを構築する設問で全国平均を大きく下回った。
- ・ 授業での「考えを広げ深める話し合い」や「他者の意見を踏まえた再構成」の活動が不足していた可能性がある。

○ICT活用の経験不足

- ・ デジタル資料の扱いに慣れていないことが、情報整理・比較の力の不足につながっていると考えられる。

（２）数学の成果・課題と指導改善のポイント

①数学の傾向や成果

- ・ 平均正答率において、正答数の中央値は、宮城県とは－４ポイント、全国とは－５ポイントであった。また、正答数分布グラフから、正答数が５問以下（全１６問）におよそ５割強の生徒が分布しており、本校の平均正答数、平均正答率の低さの要因になった。
- ・ 学習指導要領の４領域（Ａ．数と式、Ｂ．図形、Ｃ．関数、Ｄ．データの活用）の平均正答率状況において、全体的な傾向は、宮城県や全国のそれと同様の状況にあった。４領域の中では、「数と式」領域における正答率の割合が高く、「データの活用」領域における正答率の割合が低かった。
- ・ 「同類項の意味」「問題場面における考察の対象を明確に捉えている」かどうかをみる問題において、それらの正答率は、宮城県や全国の正答率をやや上回った。また、「正負の数の適切な利用」「座標を求める」「箱ひげ図と四分位数の対応」をみる問題の正答率が６割を上回った。
- ・ 「２直線が平行になるための条件」「資料を整理して確立を求めることができるかどうか」「累積度数の意味を理解しているかどうか」をみる問題では、正答率が２割を下回った。また、「問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうか」をみる問題では無回答率が６割を超えるなど、証明や解答の過程が煩雑な問題、あるいは、問題が長文である問題など、宮城県や全国と同様に、無回答率が高い傾向にある。
- ・ 問題形式による正答率は、記述式でそれが低くなる傾向が見られた。
- ・ 数学に関する質問事項において、「数学の勉強は得意ですか」「数学の授業は好きですか」「数学の授業内容はよく分かりますか」という設問に対して、肯定的な回答を選んだ生徒の割合がいずれ

も全国平均・県平均を上回った。

- ・「あきらめずにいろいろな方法を考えましたか」という質問事項に対して肯定的な回答を選んだ生徒の割合は8割を超え、全国平均・県平均を上回った。また「説明や問題を読んで、書かれていることを理解することができたか」という質問事項に対しては、肯定的な回答を選んだ生徒の割合が6割であったが、全国平均・県平均下回った。さらに、「説明をする活動をよく行っていましたか」という質問事項に対して肯定的な回答を選んだ生徒の割合は3割強で、全国平均・県平均を大きく下回った。

②課題

- ・基礎・基本の理解と知識の定着において、領域や学習内容によって差が認められる。
- ・解答しようとする意欲はあるが、正答を導き出せずにいる。

③指導改善のポイント

- ・基本的な学習内容に重点を置いた反復学習を、毎時間の授業に取り入れる。このことによって、生徒に「できる・できた」を体験させるとともに、これを継続して「分かった」を実感することにつなげて、学ぶ意欲の継続と学力向上に努める。
- ・基礎・基本を正確に理解させる、また、数学に関わる知識を定着させるため、授業において計算方法や公式等、既習事項の「学び直し」を適宜取り入れながら指導する。
- ・数学における「説明する力」と「文章力」を高めるために、「証明の書き方」や「(根拠・理由)だから(等しいこと・分かること)」等、説明の進め方を具体的に示して指導する。また、証明や説明の時間を確保し、指導や支援を実践する。
- ・文章が長かったり、情報量が多かったりする問題を意図的に提示し、問題解決に向けて必要な資料や情報を読み取る力を伸ばす指導を行う。

④質問紙から

「数学」や「数学の授業」に対して肯定的に回答している生徒の割合が高かったことから、以下の指導に重点を置き、改善しながら授業を行っていく。

○「基礎・基本的な知識・技能」

- ・授業の導入時においては、前時までの学習内容の振り返りを簡潔に行う。また、展開の終末時においては、授業のねらいの達成を生徒が実感できるよう確認問題に取り組ませる。
- ・授業の終結時には「授業の振り返り」を行い、何が「分かった」「できた」、また「分からないこと。できなかったこと」を記述させ、「生徒の学習」と「授業」のPDCAサイクルを確立する。
- ・教師が小学校学習指導要領を踏まえ、生徒に既習事項の復習や関連付けを行い、学び直しを推進する。
- ・ワークやA I型学習教材等を活用し、生徒の実態に応じた問題に取り組ませ、生徒にたくさんの「分かった」「できた」を実感させ、自信を持たせる取組を継続する。

○「活用する力」

- ・計算方法、図形等の性質、公式や定理を確認する際、その根拠や関連事項についても確認する。生徒が、計算方法等を理解して覚えた後に、問題演習時間を多く設定したり、応用問題を与えたりする。
- ・学び合いの時間を設定し、自分の考えを伝えたり、友人の考えを取り入れたたりさせる。

○学習に対する興味・関心等について

- ・ICTを活用し、問題の解釈を促すとともに、理解の深化を図る。
- ・数学で学んだ内容が生活で顕著に生かされている教材を授業に取り入れる。

(2) 英語の成果・課題と指導改善のポイント

① 調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・友人からのメッセージやインターネットの使用に関する文章を読んで答える設問は、県平均と同程度の正答率であり、身近な内容や興味のある内容について理解できる生徒が多い。
- ・選択問題については、無回答者はほぼいない。

(課題)

- ・技能別正答率において、3技能全てが全国平均・県平均を大きく下回っている。
- ・「聞くこと」に関する問題において、基本的な問題でも、正答率が県平均を大きく下回っている。
- ・記述問題では無回答率が高い傾向にあり、「書くこと」に対する苦手意識が強い。

② 指導改善のポイント

- ・普段の授業から、4技能をバランスよく指導できるよう計画を再考する。
- ・授業の中に「書くこと」に関する言語活動を多く取り入れ、苦手意識を取り除く。
- ・基本的な知識や技能の習得に向けて、授業内で既習事項を繰り返し指導していくことによって、単語や語彙の定着を図る。また、予習や家庭学習の内容を一人一人チェックし、助言することで基本的知識・技能を身に付けさせる。
- ・英語を「聞くこと」の能力を高めるため、英語を聞くことを習慣化させる。そのために、授業の帯活動で積極的に small talk を取り入れてみる。
- ・英語を「話すこと」に対する抵抗をなくすため、授業の中に「パフォーマンステスト」を取り入れることで、必然的に英語を話す機会を作り出して、英語を話すことに対する恥ずかしさや苦手意識を取り除く。特に英語が苦手な生徒については、取り組みやすくなるよう、そして何度も繰り返して取り組むことができるように、ICT機器を活用させ、繰り返し模範音声聞いて模倣させる。

7 生徒質問紙調査結果から (○成果、▲課題)

(1) 生活習慣・学習習慣について

- 朝食を毎日食べて登校している生徒が、7割以上いる。
- 毎日同じ時刻に寝ている生徒が7割以上いる。
- 毎日同じ時刻に起きている生徒が9割以上いる。
- ▲スマートフォンやPC等でSNS・動画を視聴する時間が、1日4時間以上の生徒が3割以上おり、全国平均・県平均を上回っている。
- ▲親や家族と学校の勉強のことについて話すのが、月に1～2回である生徒が4割以上おり、全国平均・県平均を上回っている(県、全国は週に1～2回である生徒が一番多い。)

(2) 規範意識・自己有用感について

- 将来の夢や目標を7割近くの生徒が持っており、全国平均・県平均と同程度である。
- ▲いじめについて、ほとんどの生徒が「いじめはどんな理由があってもいけないこと」と認識し

ているが、一部「当てはまらない」と回答した生徒がいた。

▲困りごとや不安を相談することを苦手としている生徒は、2～3割程度いる。

(3) 学習に対する興味・関心等について

▲家庭で、平日2時間以上の学習時間を確保している生徒は4割弱、それに満たない、もしくは確保していない生徒が約6割おり、30分より少ない生徒は1割程度いる。休日については、2時間以上が2割程度で、それに満たないが7割いる（無回答もいた）。

▲6割程度の生徒が、新聞をほとんど読まない、または全く読まないと回答している。

▲PCやタブレットを勉強のために全く使っていない生徒が4割弱いる。

8 今後の取組

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

①生徒が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の継続と工夫

- ・生徒の実態に加え、宮城県教育委員会の示す「子供の学びを支援する5つの提言～自立した学習者の育成を目指して～」を受け、協働的な学びを取り入れた授業展開が効果的と捉え、校内研究副題に掲げて取り組んでいる。協働場面において、習熟度が高い生徒にとって、教えることは理解をより深め、習熟度が低い生徒にとっては、同級生に教えてもらえる安心感を得ることができ、双方に良い効果がもたらされると考えている。
- ・学習課題の設定場面において、生徒の実態に応じて課題を吟味する。取り組む内容を明確にすることにより、学習に向かう姿勢と学習意欲の継続を図る。
- ・校内研究により、生徒に身に付けさせたい「確かな学力」を明確にし、教師が互いに授業を見合うなど、学力向上に向けた指導力の向上を目指す。
- ・家庭学習と連動した授業づくりを模索していく。

②個に応じた学習支援の継続と工夫

- ・各教科で現在進めている小テストや単元の振り返りシートなどを活用し、生徒個々の習熟度を把握すると共に、生徒の実態に応じた学習課題の設定を一層工夫する。
- ・習熟度に応じた少人数学習やチームティーチングにより、学習支援を継続していく。
- ・AI型学習教材を活用し、過去の学習内容を確認したり、個に応じた振り返りや復習を行ったりする。（全員がAI型学習教材に取り組むQタイムの設定）

③ICT機器の効果的な活用

- ・生徒の苦手箇所をICT機器で置換することによって、学習への取組を阻害しているものを取り除く。
- ・小学校との連携の中で、基礎となる学習（読む、書く、聞く等）の定着と学習規律の確立を図る。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

①基本的生活習慣の確立

- ・生徒会執行部を中心に進めている「スーパーうみねこルール」の改訂を通して、生活のリズムを整え、現実的かつ健康的な生活を送ることへの意識を啓発する。
- ・生徒会の保健・安全委員会で実践している「スマイルタイム」に、真剣な態度で臨んでいる。これを受け、自分の生活の振り返りから生活改善に結び付けながら生活習慣の確立を図る。

②自己有用感の涵養

- ・学級活動や学校行事で生徒の活躍の場を意図的に設ける。これらの取組を通して、生徒の個性や得意なことを認めたり、生徒が自身の活躍を振り返ったりすることで、「良かった」と思うことができるようにする。
- ・生徒の希望や特性に応じた上級学校の紹介はもちろんのこと、学科や学習環境だけではなく、就職とも結び付ける。また、奨学金等の学習支援の制度などを紹介し、自分にふさわしい進路選択ができるように進路学習を進める。

③家庭学習の定着

- ・各教科の学習内容や提出課題の内容を朝の会・帰りの会等でも確認する。
- ・学習を苦手とする生徒に対し、無理なく取り組める家庭学習の方法を提示し、学習習慣の構築・定着を図る。
- ・タブレット端末を持ち帰らせ、自宅学習への活用を促したり、オンライン学習を実施したりする。

(3) 女川小学校、女川向学館、地域との連携強化

①小学校との連携

- ・校内研究の主題や副題、目指す児童・生徒像を小学校・中学校で共通のものとするすることで、9年間を見通した指導を行う。また、定期的に小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導においても9年間を系統立てて指導する。
- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。
- ・校内研究に基づいた提案授業を実施し、お互いに見合って検討する。(小中間でも授業参観を積極的に行う。)

②女川向学館との連携

- ・放課後、夏休みの学習会における学習支援に協力してもらう。
- ・各種検定において、実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深め、「家読の日」の啓発を行い、「読解力」を身に付けさせる手立てとする。
- ・総合的な学習の時間に取り組んでいる「潮活動」では、地域の人々を中心に講師として招き、各講座の学習を進める。